

研究課題：室内楽（クラリネット、ヴァイオリン、ピアノ、打楽器、ソプラノ歌唱）の作曲、及び旧作のピアノ作品の改訂、更にそれらの演奏と録音による、過去の作曲技法の変遷を踏まえた創作の可能性の探求

20世紀以降の多様な作曲技法の中で、近年の私が特に意識していたのは、ピアノ演奏の高度な技巧と結びついたインド系英国人カイクスル・ソラブジ(1892-1988)の音楽であった。それは完全な無調音楽ではなく、茫洋たる音響の渦の中に調性の片鱗が見え隠れするといったものである。私の創作も、無調と有調、美術に譬えるなら具象と抽象の間にある表現を目指すものである。

一方、創作上の大きな課題として、文明としての日本をどのように捉えるのかという問題が常にあった。芸術は、当然文化全体に深く関係するものであり、更に言えば文化そのものでもある。日本にあり、日本人として芸術創作に向かう場合、その創作は日本と無関係にはあり得ない。特に言葉を使用する創作は、より直接に日本や日本文化と対峙せざるを得なくなる。その際、特に意識したことは、言葉は意味以前に音（オン・オト）であるということと、「万葉集」の時代の日本の文学は、そこまでの悠久の過去から未来に至る日本の表象であるということであった。

一昨年、作品発表の演奏会に、「アンサンブル九条山」の出演が決まった折、そこに声楽家が加わっていることから、言葉の使用について視野に入れることとなった。そこで6年前の歌曲作品「万葉参照」の続編として、「万葉集」の歌を歌詞とする室内楽作品「室内楽第7番・万葉参照Ⅱ」を計画した。上記の問題意識の下、前回以上に言葉を大胆で自由に解釈し、言葉のみに頼らず、幾つかの楽器演奏によって、言葉の示す世界を音楽で実現しようとした。使用した歌は、柿本人麻呂「ひんがしの のにかぎろひの たつみへて〜」、持統天皇「はるすぎて なつきたるらし しろたへの〜」、額田王「きみまつと わがこひおれば わがやどの〜」他全5首である。

「室内楽第7番・万葉参照Ⅱ」は、8月から9月にかけて作曲し、数回のリハーサルの後、10月27日(土)茨木市市民総合センター(茨木市)での「第9回茨木新作音楽展」において、私(宇野)の指揮、「アンサンブル九条山」の、ヴァイオリン、クラリネット、ピアノ、打楽器、ソプラノ声楽のメンバーによって初演した。そこに於ける楽音の和音や和声の傾向は、既述の無調の中に調性の片鱗がうかがえるスタイルに寄っている。

旧作のピアノ作品の録音は、主として演奏に対する便宜から記譜上の少々の改訂を施して、録音に臨んだ。録音作品に関しては変更があり、当初の予定ではピアノ・ソナタ第1番「史書の扉から」と「破片Ⅰ」としたが、改訂にかかる時間と練習の予定から、先に一年後に予定していたピアノ・ソナタ第3番「魂の孤独〜希望」の録音を行った。ピアノ作品の全曲の録音を予定しており、その順序を入れ替えたものである。今回予定していたものは、次年度以降に行う予定である。録音は、2019年3月10日、11日、神戸学院大学メモリアルホールにて行った。演奏は中村和枝氏、録音はコウベレックス社である。

演奏時間13分ほどの作品であるが、上記2日間に渡り、各日5時間ずつの録音セッションとなった。具体的な作業は、1分から5分ほどの部分を収録しつつ、適宜録音を再生して確認し、ミスや音楽的に不十分な部分を改めて録音しながら、ひとつの最良の演奏録音を作り上げていくものである。現代の録音技術は、部分的に修正していくのが常であり、更に、全体の音響状態もミキシングによって操作することができる。録音後、録音担当者から幾つかの素材を提示され、最終的にCD化する素材は、私の方で判断した。こういった一連の活動を、全4曲分3回行い、一枚のCDとして完成させる予定である。